

国立国語研究所学術情報リポジトリ

Reassessing Glossing for Auxiliary Letters with "Golden-Light-Sutra (金光明最勝王経： Jinguangming zuishengwang jing)" in Early Middle Japanese

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-01-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 柳原, 恵津子, YANAGIHARA, Etsuko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00003098

『金光明最勝王経』平安初期点における助辞の訓法の再検討

柳原恵津子

国立国語研究所 研究系 言語変異研究領域 非常勤研究員

要旨

稿者は柳原(2020)で、西大寺本『金光明最勝王経』平安初期点における「之」の読まれ方を整理した。そして、代名詞「これ」として読む場合には「之」自体に訓点を記し、「の」「が」などの助詞として読む際には「之」を不読とすることを述べた。本稿ではさらに「者」「而」「於」について同様の調査を行い、これらの字に自立語を含む訓があてがわれる場合には当該字に施点し、助詞としてのみ解される場合には不読とする傾向が共通して見られることを指摘する。

先に挙げた諸漢字に記された読みを整理すると、柳原(2020)での調査結果と同様に、漢字自体に読みを記すのは「もの」(者)、「ひと」(者)、「(しか)も」(而)、「(おい)て」(於)、「(うへ)に」(於)などの自立語由来の和訓で読む場合に限られ、「いは」「は」「ば」(者)、「て」「てか」「に」「にして」(而)、「に」「にして」「を」(於)などの助詞類は当該字に記さず、前後の句・節に読み添える傾向が体系として確認出来る。また、定型的な表現・構文と認めてよい訓法として、「N(人)の、V(状態・行為)い(主格副助詞)は〔者〕」、会話・韻文の引用前の「而して」、「Nの於(うへ)に」、などが指摘出来る。

上記のような訓点の記し方を、同時代の他資料についての先行の論と比較すると、概ね同様の傾向を持ちながら、細かい点で本資料独特の規則があることがわかる。人を指す場合に「者」は「ひと」と読むが、「～者無し」とそのような人物が存在しないことを述べる際には「もの」と読む、「而」を引用句の前でのみ、漢籍を読む際の特徴的な訓法である「しかして」と読む、などである。これらの特徴がなぜ本資料に見られるのか、今後の研究が待たれる。

キーワード：西大寺本『金光明最勝王経』平安初期点、訓点資料、「者」、「而」、「於」

1. はじめに

稿者は前稿(柳原2020)で西大寺本『金光明最勝王経』平安初期点の中で不読字として扱われる語(漢字)を整理した。そして具体例として「之」の訓法を概観し、自立語である代名詞「これ」として読む場合には「之」自体に加点され、「の」「が」などの助詞(付属語)として読む場合には「之」自体は不読として先行する節の末尾に加点される傾向があることを指摘した。これらからうかがえるのは、当該字を読むか不読とするか、読むとしたらどう読むかを判断するに当たって加点者は、あてがう和訓の品詞は何か、どの構文や語法を選んで読むか、といったきわめて語学的な判断を下しながら加点を行っていたであろうということである。

前稿では、「之」について用例を挙げながら分析を行ったが、「而」「於」については訓法ごとの用例数を提示して「之」と類似の傾向にあることを指摘するのみにとどまった。この続きの作業として、本稿では「者」「而」「於」の事例を用例とともに記述し、前稿で指摘した傾向が本資料全般について言えるものであることを述べたい。

2. 柳原(2020)の概要と本稿の着眼点

前稿で、稿者は以下の諸点を整理、指摘した。

柳原 (2020)

- ① 西大寺本『金光明最勝王経』平安初期点で不読字とされる字を整理した。その過程で、不読か否かは漢字一字ごとに定まるのではなく、当該字の中でも用法ごとに不読とする用法とそうでない用法とが定まっていることを指摘した。
- ② 具体例として用法の広い「之」に着目し、付訓の状況を整理した。その結果、格助詞「の」「が」などの助詞相当の付訓は「之」字自体ではなく、前接する名詞に読み添えられ、代名詞「これ」として読ませるときには「之」字自体に格助詞「を」を読み添えることを述べた。さらに類似した助辞「於」「而」の加点の実態を数値的に概観し、「之」と同様に、自立語を含む訓をあてがう場合には当該字に加点し、助詞のみ読み添える場合には不読とする傾向が共通することを仮説として述べた。そして、平安初期の訓点読解の場では、当該字そのものに常に加点して読むという形ですべての漢字と定訓が結びついていたのではなく、助詞は対応する助辞の有無を問わず、訓読文となったときに文節を構成する自立語相当の字に読み添えるといった、漢字の定訓よりも日本語の構文の側面から体系だった視点で加点の場所が決まる一面があったことを指摘した。
- ③ 平安初期における「之」字の訓法は、平安中期に成立する記録体に成立直後から備わっていた構文と連動しているように見えることを指摘した。助詞類も含めて、定訓に漢字が強く結びついていたことを前提として捉えると理由が説明しにくい訓法も、平安初期・中期の漢文訓読の場での漢字理解のあり方を考慮すると説明可能であることを指摘した。

上記のうち②については、実際に挙例しながら詳細に検討出来たのは「之」のみで、補足として「於」「而」の訓法の種類と加点のあり方を数値で示したのみであった。漢文の中でもっと頻用され、構文を形作るこれらの語については、文献ごとに指摘されてきた読みに関する報告や説を整理しながら、助辞ごとに個別の事例を収集し、体系的に捉えていくべきだろう。

このような意図をもって、本稿では以下の3点について調査結果の整理と考察を行っていく。

- ① 柳原 (2020) で訓法の種類と訓法ごとの用例数のみ示した「於」「而」、またこれらと同様に広く用いられる助辞である「者」について、用例を精査し、整理する。
- ② その結果をもとに、柳原 (2020) で述べた傾向がどの程度一般化出来るかを考察する。
- ③ 同時代や他の時代の訓点資料に見られる傾向と、平安初期の段階がどのようにつながるものであるか、通時的・共時的に捉える端緒を探る。

3. 西大寺本『金光明最勝王経』平安初期点における助辞類の訓法

3.1 「者」

まず、「者」について見る。この字は、たとえば『全訳 漢辞海』を見ると「□助詞」として「①…する人。…するもの。…すること。もの。こと。(訓読では名詞として読む。動詞・形容詞・動詞句・名詞句などの後に置かれ、それらを体言化して、人・物・事・時間・地点などを指す)」「②…種。…点。(数詞の後に置かれ、何種・何個などの意を表す)」「③…とは。…ものは。は。(主語の後に置かれ、主題の提示を行う)」「④…ば。…れば。(条件文の後に置かれる)」「⑤…のは。(結果を表す節の後に置かれる。原因は、その後に表現される)」「⑥…か。か。(文末に置かれ、疑問の語気を表す。「誰」と呼応して用いられることが多い)」「⑦…のようである」「(似)「若」と呼応して、なぞらえの意味に用いられる)」「⑧時間を表すことばの後につく接尾語。」の七通りの意味を挙げ、「□代名詞」として近世以降の用法としながら「この」「これ」の意味を挙げる。『漢語大詞典』『辞海』などの中国の辞書を見ると、このうちの①や⑧などを「代詞(『漢語大詞典』)」「指示之詞(『辞海』)」のように代名詞とするが、意味分類に関しては辞書の規模によるブランチの数の差程度の違いと言える。

3.1.1 訓法の種類と用例

上記の用法を持つ「者」の、『最勝王経』平安初期点(以下、このように略す)に見られる付訓のパターンと用例数は、次頁の表1¹のとおりである。

「加點」の項へは「者」字自体にヲコト点や仮名点で訓法を記した例を、「不読」の項へは「者」字自体には何も付訓をせず、前後の語句に助詞などを読み添えた例を分類した。「施点なし」には「者」自体にもその前後にも読みが記されない例を分類した。本資料ではその前後が語句または文の単位で白文となっている部分のみに見られる²。

以下、「加點」「不読」の場合について、それぞれ用例を挙げながら見ていく。

a. 加點

「者」へ加點する例は、以下の3つのケースに分類出来る。

- ① 右傍に漢字で「人」「物」(実際には牛偏のみの略体)と加點し、「者」を名詞として読む。
またはヲコト点で「ものに」「ものには」「ものは」「ものを」「ものをか」「ものと」と加點し、
名詞「者」+助詞として読む例

ここに分類するのは、「者」字自体に加點があり、名詞「ヒト」または「モノ」と読んでいる例である。白点が加點された830年ごろより3世紀から5世紀ほど時代は下がるが、古辞書を見

¹ 以下、用例数の採集・集計や挙例は春日(1985)によるが、総本山西大寺(編)(2013)影印などを参考に適宜読みを改めながら使用した。

² 「者」については、たとえば事例を列挙する際に用いる「一者」「二者」、理由を述べる際にその冒頭に用いる「所以者何」など重要な語句で施点がないことがある。これらの語句はくり返し用いられる語句で、読みがほとんど記されることがなく、白文の状態の用例が多い。

表1 『最勝王経』平安初期点における「者」字の訓法

a. 加點	176	仮名点「人」(+ヲコト点)	14
		仮名点「物」(+ヲコト点)	6
		ヲコト点「は」	57
		ヲコト点「を」「をば」「をも」「をし」	25
		ヲコト点「に」「には」「にも」	16
		ヲコト点「物に」「物には」「物は」「物を」「物をか」「物と」	13
		ヲコト点「の」	8
		ヲコト点「い」	3
		ヲコト点「とに」「との」	2
		ヲコト点「なり」「(な)らむに」	2
		ヲコト点「たる」	1
		字音語+ヲコト点「を」「と」「の」「い」「たる」「に」「は」「も」他	29
b. 不読	89	読み添え「いは」	33
		読み添え「ば」	16
		読み添え「は」	13
		読み添え「を」「をば」「をか」「をぞ」	11
		読み添え「といふは」	5
		読み添え「ては」	3
		読み添え「ときには」	2
		読み添え「が」	1
		読み添え「とならば」	1
		読み添え「には」	1
		読み添え「らば」	1
		読み添え「物なり」	1
		読み添え「のところに」	1
c. 施点なし	206	施点なし	166
		字音語+〇	36
		題・注	4
総計			471

ると、前田本『色葉字類抄』に「物^{モノ} ^{文弗反} ^{白一尤一鬼一} 者^同 ^{章也反} 肖^同 體^同」³ (下モ 102 オ人倫), 「人^{音仁} ^{ヒト} ^{男女之稱也} 者^同 仁^同 獸^同 士^同」(下ヒ 92 ウ人倫), 「人^{ヒト} 仁者^{已上同}」(下ヒ 100 ウ名字), 観智院本『類聚名義抄』に「者^{諸野反} ^{モノ} ^{ヒト} ^{ミキ}」⁴ (仏中 100) とある。これらから、書く際には、「モノ」「ヒト」という和語を表すために「物(モノ)」「人(ヒト)」に準じて「者」が用いられ、読む際には「者」を「ヒト」「モノ」どちらにも読んだことがわかる。『最勝王経』

³ 古辞書用例中の割書は、斜線(／)で改行を示す。

⁴ 「ヒト」に上平, 「ミキ」に上上濁の声点あり。

平安初期点で「ヒト」と加点された例が 14 例、「モノ」と加点された例が 19 例あることは、後世の古辞書類からわかる「者」の読みが、この時期の訓点資料で矛盾しない形ですでに定訓として固定していることを示している。

以下、仮名点やヲコト点で「人」「物」⁵と加点した例を挙げる。

- (1) 光明普ク照りて、種種の天の樂、妙なる音聲を出（し）て、瞻部洲に有（ら）ユル睡眠せる者を、皆悉ク覺悟セ令む。(183 頁)
- (2) 苗實皆善ク成りて、人として飢饉する者無（け）む。(163 頁)
- (3) 見レば諸の禽獸たる豺と狼と狐と狸と鵬と鷺との屬の血肉を食む者、皆悉ク奔り飛びて一向にして〔而〕⁽⁹⁾去ク。(178 頁)

訓点資料で「者」を「ヒト」と読むか「モノ」と読むかについては、門前（1959）に各時代の『法華経』での「者」の訓法を追った研究があり、平安初期には人ならば「ヒト」、物や事柄なら「モノ」と読むのに対して、平安中期以降はすべて「モノ」と読むと指摘している。平安初期（830 年頃）加点の本資料では、たとえば上記のうち（1）（2）の例はともに人を指すが、「ヒト」と読む場合と「モノ」と読む場合があるとわかる。この点については追って詳しく検討するが、ここでは『最勝王経』平安初期点で、人を指す「者」を「ヒト」「モノ」と読む例がどちらも一定数あることを確認しておく。

- ② ヲコト点で「を（をば、をも、をし）」、「に（には、にも）」、「の」、「い」、「とに、との」、「は」、
「なり」、「（な）らむに」、「たる」を加点する例

ここに分類するのは、「者」字自体に加点があり、格助詞「を」「の」「と」（これらに他の助詞が後接したものを含む）、係助詞「は」、副助詞「い」、助動詞「なり」「たり」を補って読ませる例である。

- (4) 聽聞すること有（ら）む者は、解脱せず〔不〕といふこと無（け）む。(30 頁)
- (5) 纏蓋捨（て）たるヒトヲ敬礼す、心清淨なるヒトを敬礼す、光明のゴトクいます者を敬礼す (144 頁)

上記（4）（5）は、自立語部分についての読みの情報は何もなく、助詞のみが示されている。このような場合、「者」は名詞（「ヒト」あるいは「モノ」としても読まれているか、助詞としてのみ「有（ら）む者」「います者」のように読まれるのか、ヲコト点を機械的に解説するという作業からはわからず、用例を精査して規則の有無を検討する必要がある。

⁵ 用例の記載方法は春日（1985）にしたがう。すなわち、原漢文を漢字で、ヲコト点で記された訓を平仮名、仮名点で記された訓を片仮名で記し、春日による補読は（ ）で囲い、平仮名で記し、不読字を〔 〕で囲う。ただし春日が仮名にひらいて表記した助詞助動詞のうち原本を見ると当該字に施点していることがわかる語（〔不〕、〔者〕など）については、原本に即し、漢字とルビで記す（「不」「者」）。

③ 二字（またはそれ以上）の字音語の構成要素である「者」の例

ここに分類するのは、「者」が二字（またはそれ以上）の字音語の一部として現れる例である。字音語と解釈出来る語は本資料に異なり語数で16語見られ、1語（長者子）が三文字のうちの真ん中に位置し、残り15語は「者」が最後に位置する。最後に位置する15語の「者」には、格助詞「を」「と」「の」「い」「たる」「に」「は」「も」などが加点された例がある（29例、延べ語数）。それら29例に見られる語は「護世者、獨覺聖者、尊者、受持者、持水長者、醫者、壽者、無上正遍知者、長者、最小者、智者、作者、持經者、說法者、解脱者」の15語（異なり語数）、および「長者子」である。

(6) 是の故に智者は一切の法は皆實體無しと了（し）ヌレども、但世俗に隨（ひ）て見ルが如ク聞（く）が如ク、其の事を表宣す。(93頁)

(7) 我レ今彼の尊者を讚歎（せ）むこと、皆往昔の仙人の説の如クせむ。(137頁)

このような例は、名詞の一部として用いられている点で①と近いが、「者」字の和訓を考察する上で①とは分ける必要がある。なお、「者」字が語末ではないために施点されない「長者子」のような例と、語末に位置するが文脈上施点の必要がなく施点されない例を、「c. 施点なし」として分類した。そちらに見られた語は本項目と共通する「作者、長者」と共通しない「侍者、長者子」の4語（異なり語数）である。

b. 不読

ここに分類するのは、「者」字自体には何も加点せずに不読とする例である。この場合、先行する語に助詞などを読み添える。用例数としては「いは」が33例と最も多く、「は」（13例）、「ば」（16例）、「を（をば、をか、をぞ）」（11例）などが一定数見られ、少数例現れる「ては」「には」「といふは」「とならば」「が」「らば」「物なり」などと合わせて、89例である。「a. 加点」の176例の方が2倍近く多いものの、「b. 不読」の例も一定数見られる。

また、これらの読み添えられる語は「物なり」1例をのぞいてすべて助詞または助詞相当の連語と言えるものの範囲であり、柳原（2020）で「之」（および補足的に「於」「而」）を例に論じた傾向と同様であることがわかる。

(8) 復次（に）善男子、是の法身は〔者〕惑障清淨になりヌルをモチテ、能ク應身を現す。(29頁)

(9) 若善男子善女人の能ク聽受するいは〔者〕、一切の罪障を皆悉ク除滅し、最清淨なること得。(73頁)

(10) 「善女人、若疑惑有らば〔者〕、汝が意に隨（ひ）て問ハ所ヨ。」(89頁)

(11) 若有（ら）む人王の是の經を受持し、恭敬し供養（せ）むトキには〔者〕、爲に衰患を消（さ）む。其を安隱に（あら）令（め）む。(101頁)

これらの例は、「者」を「ヒト」「モノ」と読んで名詞として理解することはせず、いずれも「者」

を不読とし、「いは」「は」「ば」「ときには」といった助詞や助詞相当の連語に「者」の助詞としての意味を見ることが出来るという形で読んでいる。

c. 施点なし

ここに分類するのは、「者」自体にも、先行する句や節の末尾にも加點がない例である。出現の仕方によって①当該部分が二字以上の句の単位で白文の状態である、②字音語の一部として出現し、三字の語の真ん中（長者子）または語末にあり、文脈上助詞助動詞などを読み添えない例、③施点のない奥書や注記の中の例、の3種に分類して見ていく。

① 当該部分が二字以上の句の単位で白文の状態である例

この項目に分類される例は166例と、『最勝王経』平安初期点に見られる「者」字全体（471例）の35%あまりを占めるが、その大多数の144例が挙例する際の「一者」「二者」（「数詞＋者」という言い回しで用いられた例である。これだけ出現するにもかかわらず、施点された例は下記1例のみである。

(12) 五者^は眞實の無差別の相たる平等の法身を證得（し）たまへル故に、名爲涅槃。（15頁）

他には「何者」（7例）、「所以者何」（4例）、「今者」（3例）などがここに分類される。形式的であるのに（あるいはそれゆえに）読みが記されない表現の中に不読例が多く見られるのが「者」の特徴であり、上記以外の8例は陀羅尼や本文の割書部分、定型的な表現ではない白文（無訓）の部分に見られる例である。

② 字音語の一部として出現し、三字の語の真ん中（長者子）または語末にあり、読み添えない例

ここに分類したのは、字音語「侍者」「作者」「長者」「長者子」として用いられ、かつ文脈上不要で「者」に助詞・助動詞などの加點のない例である。36例のうち31例が「長者子」、3例が「長者」、1例が「侍者」「作者」が各1例である。

③ 施点のない奥書や注記の中の例

ここに分類したのは、奥書や傍注など、本文以外の部分にある例である。4例が該当する。以上、『最勝王経』平安初期点における「者」の訓法を整理した。

3.1.2 「者」字の用法と語法・構文による読み分け

前節で「a. 加點」の項②に分類した、「者」に「ヒト」「モノ」という名詞を示唆する読みが加點されず、助詞・助動詞のみが加點された例は、名詞「ヒト」「モノ」が書き記されていないだけで実際には読まれたのか、「b. 不読」の項目に挙げた例のように、助詞のみを読み添えたのだろうか。施点の状況だけでは判断がつかないが、構文的な、また文脈的な条件から詳細に用例を

検討すると、「者」自体に施点する場合と不読とする場合に以下に述べるような差異が見られることがわかる⁶。

a. 構文的条件

まず、「者」が置かれている構文的な条件によって、以下に挙げるように施点のされ方がはっきりと区別されている。

i) 接続助詞「ば」として読む例は、「b. 不読」に限られる（前掲（10）など）。

3.1 冒頭に挙げた辞書類の記述で□（助詞）「④…ば。…れば。（条件文の後に置かれる）」（『全訳 漢辞海』）とされていたような、条件節の末尾に置かれて主文へ繋ぐ「者」を接続助詞「ば」を補うことで読む例が16例見られるが、いずれも「者」自体は不読とし、条件節の末尾にあたる語に、マコト点で「ば（は）」を加点する。

(13) (= (10)) 「善女天、若疑惑有^らば〔者〕、汝が意に隨（ひ）て問ハ所ヨ。」（89頁）

(14) 若有（ら）む方處に、説法の師の爲にとして高座を敷一置して、經を演説（せし）メば〔者〕、我レ神力を以て本身をば現（せ）ず〔不〕して、〔於〕座所に在（り）て、頂に其の足を戴（か）む。（151頁）

係助詞「は」と位置（漢字の右上隅）も形状も同じ星点を記すことで表現されるが、(13) (14)の先行する活用語が未然形とわかるような弁別のための施点があり、判断が困難なことはほぼない。また、接続助詞「ば」と読む例が「b. 不読」の形で一定数見られる一方、「者」自体にこのような施点がされることはないという点で、明確に読み分けがなされていることがわかる。

ii) 準体用法は定型的な構文の中に現れる。

(15) (= (4)) 聽聞すること有（ら）む^者は、解脱せず〔不〕といふこと無（け）む。（30頁）

上記のような「者」に助詞のみを加点した例は（「a. 加点」②参照）、「者」を「^{もの}は」「^{ひと}は」のように名詞を補って読むとも、「有（ら）む^は者」のように加点された助詞としてのみ読むとも解釈出来る。仮に後者のように読むとしたら、「有らむ^{もの}者^は」の「者」が省略された準体用法ということになる。だとすれば、他の文脈でどの程度準体用法が用いられるかが、「者」の読み方を確定するひとつの指標となるだろう。

⁶ 加点という作業は、「①漢文の学習経験から加点者が帰納した古代漢語の語法に当てはめて、当該字の用法に適した読みとなる加点を行う」という極と、「②意図的あるいは結果的に意識と言える読みを施して日本語の漢文訓読文として文意を伝える加点を行う」という極との間で、ある程度機械的に、難解な箇所で行錯誤しながら行われるものであっただろう。施点したい字の「構文的条件」と「文脈的条件」は相補的ではなく、常に重なって、連動する部分を持ちながら存在し、①の場合は前者の条件が、②の場合は後者が主導する形で加点されたと考えられる。このように捉え、ここでは暫定的に、両者のうちいずれに、より比重を置いて施された読みであるかという観点から分類・整理した。

たとえば係助詞「は」や「は」を含む主な連語を、「者」自体にあるいは先行する語の末尾に加点するケースでの、文脈のパターンと加点の方法の分布をまとめたのが表2である。「者」がかかわる例に限られるが、『最勝王経』平安初期点、巻1での準体用法の現れ方には偏りがあることがわかる。

表2 「者」への係助詞「は」を含む付訓の用例数

	※太枠内が準体用法の例		
	施点	不読	
a. 加点「は」(57例)	(人) + は 数詞 + は	56 1 0	0 0
b. 不読「は」(13例)	(人以外のN) + は	0	7
	準体用法 (「は」)	0	1
	といひしは	0	5
「といふは」(5例)	といふは	0	5
「いは」(33例)	いは	0	33
	準体用法 計	0	44

- ① 「者」に先行する句や節が人の場合には、「者」自体に「は」と加点する。
- ② 「者」に先行する句や節が人以外の事物の場合には、「者」自体は不読とし、先行する句や節の末尾に「は」(あるいは「は」を含む連語)を加点する。
- ③ 「といひしは」「といふは」という準体用法からなる定型的な表現は、「者」自体は不読として先行する句や節の末尾に加点する⁷。
- ④ 「～Vい(主格副助詞)は」という言い回しは、「者」自体を不読とし、先行する句や節の末尾にヲコト点によって記す⁸。ただし、用いるのは直前に同じ人物について言及があり、さらに詳しくその人の状態や行為などについて述べる「N(人)の、V(状態・行為)いは〔者〕」という構文をとる際に限られる(後述)。
- ⑤ ③④からはずれる形で準体用法が用いられる例は、「者」自体は不読とし、先行する句や節の末尾に加点する1例が見られるのみである。

上記①の例には(15)の例が、②の例には(8)が挙げられる。③は次のように現れる。

- (16) 復次善男子、一切の諸佛は自他を利益して、〔於〕究竟に至^レタシタマヘリ。自利益といふは〔者〕是レ法如如なり、利益他といふは〔者〕是レ如如智なり。能ク自他の利益の〔之〕事に於て、而も自在を得たまヘリ。(23頁)
- (17) 流水といひしは〔者〕、即我が身是レなり。(184頁)

⁷ 前者は「といふ」のヲコト点+「し」のヲコト点+「は」のヲコト点、後者は「といふ」のヲコト点+「は」のヲコト点で記す。

⁸ 漢字中央に星点で「い」、右上に星点で「は」のヲコト点で記す。

いずれの例も三字あるいは二字の漢語の末尾の漢字に加点されている（下線部）。「といふは」は漢字右上に「フ」の記号を記す形で表すので、ヲコト点の解釈がそれで正しいかという問題がある。けれども、「といふ」「し」「は」の三つのヲコト点で表現する（つまり要素ごとにどの漢字に施点することも出来ただろう）「といひしは」が5例とも「者」を不読とすることと、「といふは」がやはり同様である背景に、同じ基準があると考えても矛盾が生じないことには注意してよい。

④の例は先に挙げた（9）の他、たとえば次のように現れる。

- (18) 是の故に若有（ら）むヒトノ、得阿耨多羅三藐三菩提を欲（は）むいは〔者〕、〔於〕諸の經の中に、一句一頌をも、人の爲に解説すべし（50頁）

これらの例はいずれも、先行する節で「善男子善女人（9）」、「有（ら）むヒト（18）」のように人物が示され、その後ろに「能ク聽受する（9）」「得阿耨多羅三藐三菩提を欲（は）む（18）」と、その人物の状態や行為を詳しく述べている。「者」が人を示す場合には「者」に加点し（①）、人以外の事物の場合には不読とする（②）という原則に沿えば、ここに挙げた（9）（18）の例は「者」に加点されて「ヒト」「モノ」と読むはずだが、先に人名・身分名などが記された場合には、おそらく重複を避けるためであろう、主格を表す副助詞「い」を用いた以下の構文をとって、「者」自体は不読とする。

N（人）の、V（状態・行為）い（主格副助詞）は〔者〕

副助詞「い」を挟んだ場合を連体用法と呼ぶべきかは存疑であるが、「ヒト」「モノ」という名詞を挟まない場合に「者」を不読とすることが重要である。

また、上記以外の「b. 不読」の事例の中に、副助詞「い」を挟まない準体用法が1例あった。

- (19) 害の中に極（め）て重キは〔者〕、國の位を失フヨリ過（ぎ）たるは無し、皆諂佞の人
に因（る）なり。此に爲りて當に治罰セヨ。（162頁）

この例は、まず「害」と名詞そのものを提示し、その後対象範囲を狭める条件（「の中に極（め）て重キ」）を述べている。名詞が人ではなく（上記②）、さらにまず名詞が置かれた後、その詳細を叙述する（上記④）文脈であるから、大きく傾向が異なる例ではないと言えるだろう。ただし、「者」を解さない通常の文脈で準体用法がどのような条件でどの程度用いられるのか、更に検討を要するところである。

以上 i)、ii) で言及したことをまとめると、次のようになる。

- i) 接続助詞「ば」を読み添える（つまり「者」が名詞として「人」の意味を持たない）場合には、「者」は不読とする。

- ii) 「者」を「ヒト」「モノ」と読まないことによって準体用法をとる確例が「者」を不読とする例に見られるが、これと同じ構文的条件が「者」に加点する場合には見られず、両者に明確な使い分けが見られる。

これらから、係助詞「は」をはじめとした助詞のみを「者」に加点する場合と不読とする場合には、構文的な差異があることがわかる。

b. 文脈的条件

また、表2およびそこから導きだした考察①・②などから、以下のような文脈的条件も指摘出来る。

- iii) 「者」に先行する句や節が人の場合は「者」に加点し、事物の場合には「者」を不読とする。
iv) iii) と関連して、「ヒト」「モノ」以外の形式名詞を補って読む場合には、「者」字は不読となる。(前掲用例 (11) 参照)。

上記 i) ～iv) から、「者」に「は」などの助詞のみが加点されている場合には、「者」を「ヒト」または「モノ」と読むと捉えるのが妥当と言える。

3.1.3 『最勝王経』平安初期点における「者」字の訓法のまとめ

以上、『最勝王経』平安初期点における「者」字の訓法を整理すると以下ようになる。

- ① 「者」自体に「ヒト」「モノ」と施点している例が見受けられ、名詞として読む例があることがわかる。
- ② 助詞のみが読み添えられた「者」を「ヒト」「モノ」と読むかについては、以下の3点から読むのが妥当と推察出来る。
 - i) 「者」に「は」のヲコト点が加点されている場合、すべてが係助詞と判断出来、「者」字を不読とする場合には、係助詞として読む例と接続助詞として読む例がほぼ同数であるのと異なる。
 - ii) 「者」に助詞のみが加点されている場合に「ヒト」「モノ」と読まない準体用法の形で読むこととなるが、準体用法は当該の名詞が先に述べられ、反復を避ける際に使われる「N(人)の、V(状態・行為)い(主格副助詞)は〔者〕」という構文をとる際のみに見られる。
 - iii) 「者」を不読とする場合には、人ではない事物が話題となるが、「者」に加点する場合にはかならず人が話題となる。

①に挙げたような加点は、「ひと」「もの」どちらで読むかを明示するためのものと捉える

のが自然であるが⁹、そのような加点者の意図を恐らく超える形で、「者」に助詞のみが施点された例は「ひと」「もの」を補って読むのが妥当ということも、示唆するのである。

3.2 「而」

「而」自体の漢語での用法の幅は、先の「者」と同じく『全訳 漢辞海』を見ると、まず ér と néng の発音があるとして、それぞれの発音に対応する意味が挙げられている。ér の音には「㊦名詞」として「①下向きに垂れているほおひげ」, 「㊧代名詞」として「①なんじ・ナンジ」, 「㊨接続詞」として「①語と語, 句と句, 文と文をつなぐ。しこうして・シカウシテ。しかも。しかるに。しかるを。すなわち・すなはち。」「②副詞的修飾語と述語とをつなぐ。」「③主語と述語とをつなぐ。」「④助動詞「得」と動詞をつなぐ」, 「㊩助詞」として「①《感嘆・反語・希求などの語気を表す》通耳。」「②《上下・前後などの語の前に置かれて、その限度を表す》「而上^{ジジョウ}」, 「㊪前置詞」として「①…のように。ごとく。」の意を挙げる。また、néng の音に、「㊫助動詞」として「①…できる。よく。あたう・アタフ。」の意があるとする。これらの用法のうち、実際に本文中に現れる例のほとんどが、㊨のなかのいずれかに分類出来る例である。

3.2.1 訓法の種類と用例

先の節にならって、表3に「而」の本資料に見られる付訓のパターンと用例数を示す。

表3 『最勝王経』平安初期点における「而」の訓法

a. 加点	52	(しか) も	43
		(しか) して	5
		(しか) るものを	2
		(しかる) ものを	1
		しかしながらも	1
		b. 不読	
		読み添え「て」・「てか」	42
		読み添え「して」	14
		読み添え「に」・「にして」	12
		読み添え「もちて」・「もって」	4
		読み添え「(しか) れども」	4
		読み添え「を」	4
		読み添え「として」・「とを」	2
		読み添え「ものを」	1
c. 施点なし	32	読み添えなし	22
		白文	9
		注	1
総計			167

⁹「もの」と「ひと」の使い分けなどについては、先述の門前(1959)、また東辻(1997)などがある。

a. 加^二点

ここに分類するのは、「而」自体に加^二点のあるものである。全用例 167 例のうちの 52 例に「而」の字への直接の加^二点が見られるが、語形全体が記された、とりわけ「しか」にあたる部分が加^二点されているのは「しかしながらも」1 例で、他は語尾の部分のみが記されている。ヲコト点「も」のみを記した「(しか)も」と思われる例が 43 例と「而」へ施^二点した例の大半をしめ、他には「(しか)して」「(しか)るものを」「(しかる)ものを」の例が確認出来る。

- (20) 魔と軍との衆を降して而も法の鼓を撃つ。諸の外道を制して、淨心を起サ令む。(2 頁)
- (21) 尔時に大自在梵天王、亦從座起チ、偏袒右肩、右膝著地、掌を合セ恭み敬ひ頂をモチテ佛の足を礼(し)たてまつる。而して白佛言「世尊、此の金光明最勝王經は、希有にして量り難し。初も中も後も善なり。…(中略)…」とのたまふ(73 頁)
- (22) [[由] 10] 正法をモチテ王を得たり、而ルモノを其の法を行(せ)ず[不]して、國人を皆破散すること、象の蓮池を踏むが如ク(あらし)むルに[[由](り)て、惡風起ルこと恒において無ク暴キ雨非時に下シ、妖の星多ク變恠し日月も蝕ケテ光リ無ケム。(160 頁)
- (23) 夫人王に白し已(り)て、身を擧(げ)て而ガラも地に躓(れ)て悲び痛み心悶絶し荒迷して覺知(せ)ず[不]なりヌ。(197 頁)

先述の、また (20) (21) (22) の例のように「而」を「しか」を補って読むという根拠となる例が少なく、本資料には (23) しかない。しかし前田本『色葉字類抄』に「而シカモノ如之反ノシカリ尔見氏反云一、然如延反、喩如喩音奥ノ已上同」(下シ 77 オ辞字)、「而シカルヲ」(下シ 78 オ辞字)、「然而シカレトモ」(下シ 86 オ量字)、観智院本『類聚名義抄』に「而加之反シカモ・シカリノナムタチ・ナムチシテノコルコトシシカクノ禾二¹¹」(仏上 75) とあることをはじめ、大坪 (1981) に挙げられた平安時代前半期の次の用例群から「しか」を補って読むのが妥当と判断出来る¹²。

- (24) 如^(く)是^(の)、能^(く)以^(て)神力^を内^ニル^一の毛孔^ニ。而^{シカスレドモ}、令^ニ毛孔^の形量^を不^レレ^(せ)、四大海水^の形量^を不^レレ^(せ)。^{(ずあら)しむ、(滅)。(石山寺本説无垢称経平安初期点・413 頁(一〇) 13)}
- (25) 二^(は)者^(り)、知^ニ衆生^の欲樂^を、而^{カシテ}為^ニ説^レ法^を備^ニ此^の二^つ也。^{(かむ)が、(ハレリ)の二つ也。(石山寺本法華義疏長保点・409 頁(九八))}

これらから、「るものを」「ものを」と加^二点された例は「しか」を補って読むと考えられるが、「も」や「して」のみが加^二点された例は単独で助詞である可能性も検討されねばならない。とくに「して」は「而」を不読とする例にも 14 例あり、「而」に加^二点する例と、不読とする例との違いが何によるか、検討が必要である。(20)「而も」の例は、「降して而」と読むと行為の累加という原意が伝わらず、(21)「而して」も、文頭の接続詞と解さなければ、文意も通じず活用形の

¹⁰ [[]], [] は、韻文部分で句を超えて返読することを示し、原漢文で当該字を含む句の該当箇所を [[]] (この句の中では不読となる) で、返読語に読んだ箇所を [] で括る。春日 (1985) の凡例による。

¹¹ 「之」に平声の声点、「モ」右傍に「リ」、「タチ」右傍に「チ」、「ニ」に合点あり。

¹² 大坪 (1981) からの用例は同書に記す通りに引用する。

¹³ 大坪 (1981) 引用末尾丸括弧内の数字は、同書引用ページ数と用例番号を示す。

上でも接続不可能であり、ともに「しか」を補いたい例である。

b. 不読

ここに分類するのは、「而」自体に加点せず、先行する句や節の末尾に加点する例である。接続助詞「て」を読み添える例が 83 例中 42 例と約半数を占め、以下、「して」が 14 例、「に・にして」が 12 例と続く。先に述べたように「して」と加点される例は「而」字自体にもあるが、とりわけ用例の多い「て」や「に・にして」と加点する例は「而」にはなく、前節で見た「者」同様、「而」自体に加点する場合と不読とする場合の読み分けがあることが予測出来る。

- (26) 是の四（はしら）の如來，各〔於〕其の座に，趺を跏（ね）て〔而〕坐（し）たまひヌ。（7 頁）
- (27) 彼の佛の名及此の經の名号を稱して〔而〕礼敬することを申づとして，「瑠璃金山寶花光照吉祥功德海如來を南謨（し）たてまつる。」とイへ。（148 頁）
- (28) 是の時に寶積大法師い，淨ク洗浴し已（り）て鮮なる服を着て，彼の大衆の法座の所に詣（り）て，掌を合せ虔む心をモチテ〔而〕礼敬しキ。（165 頁）
- (29) 是等の如キ人を〔而〕上首と爲り。（3 頁）

c. 施点なし

ここに分類するのは、「而」自体にも、先行する句や節の末尾にも加点がない例である。①文脈上「而」の意味や機能が反映された助詞などの施点がない、②当該部分が二字以上の句の単位で白文の状態である、③施点のない奥書や注記の中、という三つのケースに分類出来るのは「者」と同様である。「者」には字音語の末尾の例が多くあったが、無論「而」にはそのような例はなく、一方で文脈上「而」の機能に該当する助詞などが加点されない例が多くある (①)。

① 文脈上「而」の意味や機能が反映された助詞などの施点がない例

- (30) 香水を地に灑ぎ衆の名花を散^(ま)キ，師子の殊勝の法座を安置し，諸の珍寶を以て，〔而〕按^(まじ)へ飾ルコトヲ爲し，種種の寶蓋幢幡を張り^し施キ，無價の香を焼キ，諸の音樂を奏セヨ。（103 頁）
- (31) 汝今云何してか，菩提の行の^(いかに)於に〔而〕自在を得たる。（91 頁）
- (32) 非常非斷なるをモチテ，是を中道と名（づ）ク。分別有（り）と雖，體は分別無し，三數有（り）と雖，〔而〕三の體は無し。（27 頁）

上記の例では、先行する句や節に含まれる助辞「以」「於」「雖」にあてがわれた訓「以て」「於（ため）に」「雖（いふとも）」が文や節を接続する機能を果たし、「而」のみに対応する訓が見出し難い。本稿では当該字に施点しない例を「不読」と呼んでおり、これは春日などの先行の論に沿ったものだが、それらは前後の節への読み添えがあるという点で広義の「不読」と言うべきである。これに対し、今日「置き字」と呼ばれる狭義の「不読」と同義であるのは、ここに挙げる

ような例を指すのだと言える。

- (33) 余時如意寶光耀天女，〔於〕大衆の中にあり，深法を説（き）たまふを聞（き）ツ。歡喜踊躍し〔從〕座ヨリ〔而〕起チ，偏袒右肩，右膝著地，掌を合セ恭み敬フ。(89 頁)
- (34) 是の時に大梵天王，〔與〕諸の梵衆と，〔從〕座ヨリして〔而〕起チ，偏袒右肩，掌を合セ恭み敬ひ，頂をモチテ如意寶光耀菩薩の足を礼（し）たてまつる。(94 頁)

(33) の例も (30) (31) (32) と同様であるが，(34) のように「よりして」と読む例もある。2 例を比較するとわかるように，「座より（して）起ち……」というのは本資料に繰り返し現れる定型的な表現で，如来や菩薩の説法を聞いた衆人が足下へ歩み出て礼する時に用いられる。

また，連用形中止法となっている例が 1 例見られた ((35))。断定は出来ないが，「而」の直前が連用形中止法となる例は他になく，本例を孤例とするか，(26) (27) のように「て」を読み添える例が多くあることにならって「て」を読み添えるか，いずれかとなる。

- (35) 咸ク〔〔見〕〕〔於〕諸佛の，〔於〕寶樹下に在（り）て，各瑠璃の座に處たまへると，無量百千の衆の 恭み敬ひ〔而〕圍繞（し）たてまつレルとをも〔見〕つ。(34 頁)
- (36) (= (26)) 是の四（はしら）の如来，各〔於〕其の座に，踏を駈（ね）て〔而〕坐（し）たひヌ。(7 頁)

② 当該部分が二字以上の句の単位で白文の状態である例

ここに分類出来る例は 9 例見られる。「者」同様，定型的な表現のみに見られ，すでに記されている表現の施点を省略したものである。

- (37) 余時世尊，而説頌曰，「勝法は能ク生死の流を逆す。…（後略）」(74 頁)
- (38) 余時に此の大地の神女，名は〔曰〕堅牢といふい，〔於〕大衆の中にして，從座而起，佛の足を頂礼（したてまつ）り，掌を合セ恭敬（し）たてまつる。(158 頁)

(37) は (21) 同様「しかして」を補読するべき例（後述），(38) は (33) (34) 同様「座より（して）」と補読するべき例である。前者と同様の例が 6 例，後者が 3 例で，他所で読みが示された定型句として使われた例のみ白文の状態であること，逆に言えば定型句以外の例はほとんどが何らかの形で施点されているとわかる。

③ 施点のない奥書や注記の中の例

ここに分類される「而」は，注記に見られた 1 例のみである。

本節では『最勝王経』平安初期点における「而」の訓法を整理した。そして「者」同様「a. 加點」されるケースと「b. 不讀」とされるケースでは，「しか」系の接続表現として読む前者とそれ以外の後者という読み分けがあることがわかる。

3.2.2 「而」字の用法と読み分け

以上、加点の位置に着目して整理しながら用例を検討してきたが、異なる訓法との間で比較しながら検討すべき2点について追記する。

① 「(しか)も」は「しか」を補って読むのが妥当か。

この点については例文(20)を見ながら、係助詞「も」として読んでは文意が通じないことを述べた。補足ではあるが、あと2例ほど類例を挙げておく。

(39) 「童子我無上世尊を供養したてまつらむと欲フをモチテ、今如來に従(ひ)たてまつりて、舍利を芥子の如ク許りをも求請す。何以故にとならば、我レ曾し、若善男子善女人の佛の舍利を、芥子の如ク許(り)をも得て、恭敬し供養セむ、是の人は當に三十三天に生れて、而も帝釋と爲らむと説(き)しを聞(き)しをモチテなり。」(12頁)

(40) 「於此の身に依(り)て、初心を(おこ)發すこと得。修行地の心も而も顯現すること得。(26頁)

(39)は、「三十三天に生まれて、その上帝釈となるだろう」との文意だが、「生れて而」のように「動詞連用形+接続助詞「て」+係助詞「も」として理解しては文意が逆となってしまう。(40)は「初心をおこすことを得る。修行する心もその上現れることを得る。」との文意であり、「しか」を補わないと「心もも」と非文になる。よって、いずれも「しかも」と読むのが妥当であろう。

また、「b.不読」の例として先行する句や節の末尾に係助詞「も」のみを読み添えた例はない。

まとめると、以下2点の理由により「而」に施点された「も」の例は「しかも」と読むことが妥当で、「而」を不読とする例とは異なる訓法であると言える。

- i) 「しかも」の形で読まなければ誤文、あるいは非文となる。
- ii) 不読の例の中に、先行する語に「も」だけを読み添える例がない。

② 「して」を「而」字に施点する場合と先行する語に読み添える場合で、用法に違いがあるか。

(41) (= (21)) 尔時に大自在梵天王、亦從座起チ、偏袒右肩、右膝著地、掌を合セ恭み敬ひ頂をモチテ佛の足を礼(し)たてまつる。而して白佛言「世尊、此の金光明最勝王經は、希有にして量り難し。初も中も後も善なり。…(中略)…」とのたまふ(73頁)

(42) 尔時に薄伽梵そのとき〔於〕日の晡時に、〔從〕定ヨリして〔而〕起(ち)たまふ。大衆を觀察したたまふ。而して頌を説(き)て曰はク、(4頁)

(43) (= (37)) 尔時世尊、而説頌曰、「勝法は能ク生死ギアクの流を逆す。…(後略)」(74頁)

(41)(42)は施点のある例、(43)は白文だが、いずれも発話の引用前に置かれた「而」である。「而」に「して」を施点をする5例はいずれもこの発話の引用前の用法として用いられている。「b.不読」の例が以下の(44)(45)のように自由な文脈で現れるのとは全く異なる。

- (44) (= (27)) 彼の佛の名及此の經の名号を稱して〔而〕礼敬することを申ブとして、「瑠璃金山寶花光照吉祥功德海如來を南謨（し）たてまつる。」とイへ。(148 頁)
- (45) 〔〔應〕〕世尊の形像の前に在（り）て、心を一にし念を正して〔而〕安坐してシ、即妙智と三摩地とを得、并（せ）て最勝の陀羅尼を獲むとしてす〔應〕し。(136 頁)

「而（しか）して」が発話の引用前の定型的な表現の中で用いられるのに対し、「而」を不読とする例は汎用性が高い表現として用いられる。

3.2.3 『最勝王經』平安初期点における「而」字の訓法のまとめ

最後に、『最勝王經』平安初期点における「而」字の訓法の特徴を整理すると、以下のようになる。

- ① 「しか」を補って読むことで解釈がなりたつ場合は「而」字自体に施点される。それ以外の助詞や助詞相当の連語を読み添える場合は先行する句・節の末尾に読み添える。
- ② 「して」は「而」に加点する場合と直前の節に読み添える場合で用法が異なる。「而（しか）して」…会話や偈頌の直前に現れる定型表現の中でのみ用いる。「動詞連用形+形式名詞「して」〔而〕」…接続助詞「て」の延長にある表現として汎用性がある。
- ③ 用例数の多い「（しか）も」「て（てか）」「して」「に（にして）」などを含めて、「而」に加点するケースと不読とするケースが混じることはなく、施点する場所が定まっている。

①の「しか」が代名詞由来の形態素であることを考慮すると、「しかも」「しかして」などの場合のみ「而」に施点する傾向は、名詞「ヒト」「モノ」と読む例のみ当該字に施点した「者」と同様であると言える。また、②③のように語法によって「而」に施点するか不読とするかが定まり、両者が混同しないところも「者」と同じ傾向である。

3.3 「於」

「於」も古漢語において yú と wū の二つの音を持つが、意味・用法の幅は漢和辞典ではたとえば次のように説明されている（『全訳 漢辞海』）。yú の音の場合は「㊦動詞」として「①…に在る」、「②…である。…とする。」、「㊧前置詞」として「①場所、対象、比較、受身などを表す。…で。…に。…より。…によって。おいて。」、「㊨名詞」として「①姓」の用法をもち、「㊩」として連綿語の構成要素となる（於兔・オト）用法を挙げ、wū の音の場合は「㊦擬声語」として「①ああ」、「㊨名詞」として「①鳥」の意がある、とする。

実際の漢文訓読の場で現れるのは前置詞の用法や、動詞用法の例がほとんどであるが、「於」は用例数の面でも 752 例と「者」「而」よりも多く、読みのバリエーションも多岐にわたる。とくに「於」を不読とする場合に多様な助詞に準ずる表現が文脈に応じてあてがわれる。このよう

な多くの訓法のうち 5 例以上例があるものを表中に数値とともに挙げ、4 例以下のものはすべて「読み添え（その他）」の中に入れて集計したのが表 4 である。

3.3.1 訓法の種類と用例

「於」についても「者」「而」と同様、「a. 加点」「b. 不読」「c. 施点なし」それぞれのケースに分類・整理して検討する。

表 4 『最勝王経』平安初期点における「於」字の訓法

a. 加点	125	(おい) て・(おい) ては	62		
		(うへ) に・(うへ) には	56		
		(これ) が	2		
		(こ) れ	1		
		(こ) の	1		
		(もと) むるときには	1		
		して	1		
		のみに	1		
		b. 不読	611	読み添え「に」	283
				読み添え「にして」	79
読み添え「には」	14				
読み添え「にも」	9				
読み添え「にて」	5				
読み添え「を」	131				
読み添え「と」	18				
読み添え「より」「よりして」「のより」	9				
c. 施点なし	16	施点なし	3		
		白文	11		
		奥書・注	2		
総計			752		

a. 加点

「於」に加点する例は「於」の全用例 (752 例) のうち 125 例 (16.5%) と多くない。そのうち「(おい) て／ては」と施点された例が 62 例、「(うへ) に／には」と施点された例が 56 例と拮抗しており、ほかは代名詞「(これ) が」「(こ) れ」「(こ) の」が 4 例、「(もと) むるときには」「して」「のみに」各 1 例である。

- (46) 諸の天女等の集會する時には、大海の潮シホの如ク必ず來應（し）たまふ。諸の龍神藥叉衆に於て、咸ク〔爲〕上首として能ク調伏（し）たまふ。(138 頁)

- (47) 譬(へば)淨月の圓滿して翳無キが如ク、此の心い能ク一切の境界に於て清淨にして具足す。
(61 頁)
- (48) 我レ法を聞キ已レば、即阿耨多羅三藐三菩提の於に、復退轉すマジ〔不〕クナリヌ。(104 頁)

(46) (47) は「(おい) て」の例、(48) は「(うへ) に」の例である。「於」は古辞書類を見ると前田本『色葉字類抄』には「於^{ヲイテス}」(上ヲ 84 ウ辞字)、「置^{ヲク}安除於在軟罷據時處肆居」(上ヲ 83 オ辞字)、観智院本『類聚名義抄』には「於^{憶魚反 オク/コ、ニ イツクニカ/ヨリ モ}」(僧中 30)¹⁴と記載があり、「(おい) て」は「ヲク」「オク」が「於」にあてがわれていることと矛盾しないが、「に」のみが施点された例は、とくに「b.不読」に「に」を読み添える例が 283 例あることから、「(うへ) に」のように何らかの自立語を補って読むのが妥当か検証する必要がある。

春日政治はこのような「於」を「ために」と読むが(春日 1985)、研究篇でこの読みが疑わしい旨を記している。

又タメニと訓むらしいことも多い。

大乘の法の於に、常に樂みて受持す。(三ノ二二)

これはニを送つてあつて、上のノから續く場合の推讀であるが、どうも古例が見當らない。
或はウヘニなど訓ずるかも知れない。(研究篇 38 頁)

「タメニと訓むらしい」という言い方や引用末尾下線部から、「ウヘニ」の可能性も否定できないと判断していることがわかる。また大坪(1981)は次のような例を挙げながら「於」に「おい て」または「うへに」の読みがあるとし¹⁵、「ために」という読みについては一切言及していない。

- (49) 於^{ウヘ}に^レ界の善巧^{イマサ}。(石山寺本守護国界主陀羅尼經平安中期点・507 頁(一三))
- (50) 於^上に^(ニ)其^(ノ)義^(ノ)の所立^{ツル}名言^イ既^(ニ)因縁^{より}生^{するをもて}、如^レ義^(ノ)の應^レ有^{なるべし}〈白點其(ノ)義に於て〉(大東急記念文庫本大乘広百論釈論承和点・507 頁(一四))

ともに「ウヘ」「上」が加點された例である。西暦 1000 年以降を中心に訓点資料での読みを集めた『訓点語彙集成』(築島 2007-2009)を参照しても、「うへに」の例が一定数あるのに対し、「ために」は 3 例である。これらから、本稿では「於に」を「うへに」と読む。

- (51) 菩提心といふ^キは、過去にも非ず、未來にも非ず、現在にも非ず。心も亦是(ノ)如し。衆生も亦是(ノ)如し。於^(これ)が中^(これ)には二相實に不可得なり。(60 頁)
- (52) 徳を讚歎すとも、於^(これ)が中^(これ)に少分をば尚知ルことは難ケむ。況(ヤ)諸佛の徳の邊際無キはヤ。(81 頁)

¹⁴「コ、」に平上、「イツクニカ」に平上上上平(「イ」の平に点が二つあるのは「ツ」の濁点を誤ってつけたものか)、「ヨリ」に上平、「モ」に平の声点あり。

¹⁵「ニオキ(イ)テに近い意味を持つ語にノウヘ(ノウエニ・ノウヘノ・ガウヘニの三形を合せいふ)がある。もつばら「於」を読み、補讀することはない。」同書 507 頁。

- (53) 世尊は金剛の體なり、權現せるいは^(こ)於レ化身なり〔《イ》〔於〕化身ヲ權現セルナリケリ〕¹⁶ (14頁)。
- (54) 謂(はく)於【此也】¹⁷の五蘊に能ク法界において現す〔《イ》〔於〕五蘊ヲ能ク現セルイハ法界ナリ〕。(90頁)

(51) (52) は「か」が施点されているところから「これ」を春日(1985)が補読している例である。『名義抄』に「コ、ニ」とあるのは、「於」が「こ」系統の代名詞として読まれることがあったことを示している。また(53)は「レ」が仮名点で記され、(54)に「此也」との注記があり、ヲコト点で「の」を加点していることは「於」に「これ」「この」の訓があり得た直接の傍証と言えるが、ただしこれらはどちらも「〔於〕化身ヲ」「〔於〕五蘊ヲ」という名詞に「を」を読み添えた異訓があることから、検討を要する読みであったことがわかる。

- (55) 是の功德の聚に、前の功德を於^(もと)【望也】ムルときには、百分にして一にも及ばず〔不〕。乃至算數譬喩をモチテも及ブこと能(は)ず〔不〕アル所なり。(95頁)
- (56) 復は無量百千億劫に於^して當に人天にして種種の勝樂を受(けし)メむ。常に豊稔^{フニム}なること得、永ク飢饉を除(せし)メむ。(146頁)
- (57) 亦復思惟すラク、「釋迦牟尼如來は〔《イ》ノ〕無量の功德いますを〔《イ》功德ヲ〕、唯壽命^{のみ}於に、疑惑の心を生ス。」とオモフ。(7頁)

これらはいずれもほぼ孤例と言えるイレギュラーな例である。(55)の「於」に「望也」という注記があり、これと「ムルときには」の施点から春日(1985)は「(もと)む」の読みを補っている。先掲の『全訳 漢辞海』の語義を用いれば「□動詞」の「①…に在る」の意と捉えて、「以前の功德にあるときには、(『最勝王經』を書写している今の)百分の一にも及ばない」と解釈するのが妥当であり、「もとむ」はこれとそれほど遠くない意識による施点であると言えよう。

b. 不読

「者」「而」が不読となる場合は先行する句や節の末尾に助詞などを読み添えたが、「於」の場合はその後ろの句や節に読み添える。「者」「而」が接続詞や助詞として働くのに対し、「於」は前置詞としての用法が主だからである。「於」が不読とされる際には、さまざまなパターンの語句が読み添えられる。そもそも不読とされる「於」の用例数が多く、なおかつ前置詞としての用法が多岐にわたるためであろう。

しかし頻度には大きな偏りがあり、「に」が611例中の283例と半数近くを占め((58))、ついで「を」((59))「にして」((60))が多用される。

- (58) 自(ら)其の身をば隱(し)て、於座所に在〔り〕て、頂に其の足を戴(か)む。(153

¹⁶〔《イ》〕は直前の部分に2種類以上の加点がある場合の異訓であることを示す。

¹⁷【 】は本文右傍に記された注記であることを示す。

頁)

- (59) [於] 疾病を離(れ)て、壽命延びて長(か)ラむ、吉祥安樂(な)ラむ。正法興顯せむ。(31 頁)
- (60) 是の時に索訶世界の主たる大梵天王、[於] 大衆の中にして、如意寶光耀善女天を問(ひ)て曰(は)ク、(91 頁)
- (61) 無上の大法の幢を建立せり。[於] 生死の海ヨリ群迷を濟(ひ)たまふ。(87 頁)

一方、個々の用例数が少ないため、「読み添え(その他)」に含めた連語には次のようなものがある。

するに、すること、ときに、ときには、ととく、となす、とに、とは、にあらむ、にある、
 において、にし、にしては、にすとも、にせむ、にまれ、のところに、のところにして、の
 ところにも、のみに、のみを

「於」の用例が非常に多いことに加え、文脈に即して一文一文読みがあてがわれたために、さまざまな訓法が作られたと考えられる。一回的なものも多く含む多様な読みがなされたことと、平安初期という加点年代とがどの程度関わりがあるのか、さらなる検討が望まれるところである。

- (62) 是の諸の人王の手に香爐を持(ち)て經を供養(せ)む時の種種の香氣は、但此の三千大千世界のみには遍せじ[非]。[於] 一念の頃において、亦十方の無量無邊の恒河沙に等(し)キ百千万億の諸佛の國土に遍(せ)む。(106 頁)
- (63) 時に彼の諸佛、此の妙香を聞(ぎ)たまひ、斯の雲蓋及び金色にして[於] 十方界の恒河沙に等(し)キ諸佛世尊のトコロニシテ、神變を現するを觀たまひ已む。(106 頁)
- (64) 即當に呪を誦(し)て[於] 我を請召(せ)むトキには、先づ佛の名及菩薩の名字を稱して、心一つにて敬礼すべし。(148 頁)
- (65) [於] 最勝因陀羅高幢世界にアラむ。阿耨多羅三藐三菩提成(る)こと得む。(173 頁)

(62) は「於」自体に加点するべき「a. 加点」の例だろう。このような施点のブレは、『最勝王經』平安初期点には珍しい。(63) (64) は文脈に応じて形式名詞「トコロ」「トキ」を読み添えた例、(65) は先にも挙げた「～に在る」の意を読み取りながら、「於」自体を動詞としては読まなかった例だろう。どの例も「に」「にして」「において」など頻用する読みを選んで施点することも可能だが、上記のような文脈に応じた読み添えが記されていることで、文意が捉えやすくなっている。

以上、「b. 不読」の例を見たが、「者」「而」と同様、「於」に施点する「に」と読み添えの「に」に差異があるか否かが、確認すべき点として浮かび上がってくる。

c. 施点なし

ここに分類するのは、①「於」の意味や機能が反映された助詞などの施点がない例、②当該部

分が二字以上の句の単位で白文の状態である例、③施点のない奥書や注記の中の例である、の3種である。

① 「於」の意味や機能が反映された助詞などの施点がない例

この例に分類出来る例は3例見られる。

- (66) 下に過^(す)ぎ令(め)ず〔不〕〔於〕決(ら)所^(し)たる處、卒に修補すべきこと難し。(179頁)
 (67) 余時に佛妙幢菩薩に告(げ)て言はく、「汝〔於〕來世に無量無數百千萬億那庾多の劫を過^(す)ぎ已^(ま)らむ。〔於〕金光明世界アラむ。當に阿耨多羅三藐三菩提成^(ま)らむ。…(後略)」(172頁)
 (68) 復菩提樹神及諸の大衆に、我が〔於〕過去(に)菩薩の道^(のたま)をば行せしことを告ふ。(187頁)

(66)(67)は文脈上施点が必要な例である。(68)は春日(1985)の補読があるように、施点^(のたま)が落ちたと考えるのが自然な例だが、「に」のような基礎的な助詞が必要であるにもかかわらず落ちる例は、本資料では稀である。

② 当該部分が二字以上の句の単位で白文の状態である例

- (69) 余時大王及於夫人并(せ)て二の王子、哀ヲ盡クシ號^(サケ)ビ哭^(ナ)キ、瓔珞をも御(せ)ず〔不〕なりヌ、(195頁)
 (70) 於^(す)第五地行定波羅蜜。…於^(す)第六地行慧波羅蜜。…(67頁)
 (71) 善男子、菩薩摩訶薩は、〔於〕初地の中^(し)にしては、施波羅蜜を行す。〔於〕第二地にしては戒波羅蜜を行す。…〔於〕第十地^(し)にしては、智波羅蜜を行す。(67頁)

(69)は定型表現ではない通常のフレーズが白文(無点)となっている例である。(70)は、同じ文型を繰り返して列挙していく文脈である、「初地」から「第三地」まで「b.不読」の形で「中」「地」の字に「にしては」が読み添えられ((71))、「第四地」～「第九地」までが「c.施点なし」((70))、最後の「第十地」のみ再び「b.不読」の形で「地」に「にして」が読み添えられる((71))。

③ 施点のない奥書や注記の中の例

ここに分類される「於」は、奥書と注記に見られた各1例である。

3.3.2 「於」字の用法と読み分け

以上、『最勝王經』平安初期点での「於」の訓法を整理した。「ヲク(置)」「ウヘ(上)」という語が含まれているとの認識から、「(おい)て」「(うへ)に」は自立語相当であるという意識に基づいて「於」字自体に施点された^(す)と想像出来る。「に」「を」などの助詞が「於」自体には加^(す)点されないことと合わせて、やはり「者」「而」と共通の傾向があるとわかる。

最後に、これも「者」「而」と同じ論点ではあるが、「に」が施点される「a.加^(す)点」の例と「b.不読」の例の差異を見たい。

- (72) (= (48)) 我レ法を聞キ已^スレば、即阿耨多羅三藐三菩提の於に、復退轉すマジ〔不〕クナリヌ。(104 頁)
- (73) 汝今云何^(いかに)してか、菩提の行の於に〔而〕自在を得たる。(91 頁)
- (74) (= (58)) 自(ら)其の身をば隱(し)て、〔於〕座所に在〔り〕て、頂に其の足を戴(か)む。(153 頁)
- (75) 然も〔於〕晝夜六時に、偏に袒右肩、右膝著地、合掌恭敬て、心を一にし念を専して、隨喜を作す時には(47 頁)

(72) (73) は「a. 加点」の、(74) (75) は「b. 不読」の例である。その違いは、前置詞「於」が表す意味が訓読文に強制する構文の違いとなって現れている。その違いを整理すると、以下のようになるだろう。

- i) 「a. 加点」の場合は、「於 N」を「N の於 (うへ) に」と読む。先行する N に格助詞「の」が施点されており、「のに」としては文意が通じないため、「うへ」などの形式語を補読する必要があるとわかる。一方、「b. 不読」の場合は、その用法は幅広く、出来事が起きる場所 ((74))、時間 ((75)) などを自由に指す。
- ii) 「a. 加点」の「(うへ) に」も 56 例と多く用いられるが、「b. 不読」の読み添え「に」はその 5 倍の 283 例の加点例があり、こちらの訓法が圧倒的に広く用いられている。

i) で触れたことについては、たとえば「即〔於〕阿耨多羅三藐三菩提に、復退轉すマジ〔不〕クナリヌ」((72))、「菩提の行に於(おい)て〔而〕自在を得たる」((73))などと読むことも可能である。ただ、それでは「阿耨多羅三藐三菩提」「菩提の行に」の功德によって「退轉すマジ〔不〕」「〔而〕自在を得たる」という結果が得られたのだという文意が伝わりにくい。「N の於 (うへ) に」という読みは、その状況に至る起因を強調するために、別途用意された読みなのだろう。だとすると、春日が読んだ「の(ため)に」の方が日本語文としてはより文意が伝わりやすいとも言える。加点される「於に」の訓法の変遷という観点からも再考したい。

4. 考察

4.1 第 3 節のまとめ

第 3 節では、「者」「而」「於」の三つの助辞を取り上げ、訓法を整理した。それらからは共通した性質が見受けられた。

- ① いずれの助辞にも、当該漢字に加点する訓法と、当該漢字は不読字としてその前後の句や節の末尾に読み添える訓法とがある。
- ② 当該漢字に施点する訓法と、当該漢字は不読字とする訓法は、施点される位置によって明確に用法・語法を区別しており、語形として同じ助詞を施点する場合でも、当該漢字に施

点する読みと前後の句・節の末尾に施点する読みは、異なる訓法、語法のためのものである。この両者の区別はかなり明確で、両者が入り混じることはほとんどない。

- ③ 「者」の「ひと」「もの」, 「而」の「しか」, 「於」の「おいて」「うへに」など、当該字に施点する読みは、自立語に由来する要素を含む訓法である傾向がある。それゆえ、意味や運用出来る文脈が限定的で広がりをもたないことが多い。一方で、読み添えとして読まれる助詞類には、汎用性があるという傾向がある。

また、訓読する際の独自の語法と捉えられるものに、次のようなものがあった。訓点語史やあるいはもっと幅広く文法史、語法史、語誌などを考えていく上で、考慮すべき事項も含まれるであろう。

- ④ 「者」 N (人) の, V (状態・行為) い (主格副助詞) は〔者〕
 「而」 会話・韻文の引用前の「而して」
 「於」 「於 N」→「N の於 (うへ) に」

以上①～③の特徴は、柳原 (2020) で報告した「之」とも共通するものである。「之」の読みを眺めると、「これ」と代名詞として読む場合には「之」自体に加点し、格助詞「の」「が」など付属語として読む場合には、先行する節の末尾に読み添えているが、本稿で眺めた「者」「而」「於」にも同様の傾向が見られた。さらに未調査の事例について検討する必要があるが、『最勝王経』平安初期点の加点の傾向として指摘してよいであろう。

4.2 他の訓点資料での傾向 (共時的な視野から)

上記のような傾向は、平安初期訓点資料においてある程度一般化出来るであろう。たとえば(49)(50)の例を挙げながら、大坪 (1981) は次のように述べている。

ニオキ (イ) テに近い意味を持つ語にノウヘ (ノウエニ・ノウヘノ・ガウヘニの三形を合せいふ) がある。もつばら「於」を讀み、補讀することはない。(507頁)

平安期、とりわけ早い時期の訓点資料を広く見た上で、「於」を「ニオキ (イ) テ」「ノウヘ」と読む場合には必ず「於」自体に施点され、「於」を不読とすることはないというのである。「於」という字の、「ニオキ (イ) テ」「ノウヘ」が加点されるケースのみについての言及であるが、同時代の訓点資料にこの傾向が共通して見られるという指摘は重要である。

本稿ではこのような汎資料的な言及を行う用意はないが、ここまで眺めてきた主要な助辞の訓法に関する先行研究と照合しながら、平安初期訓点資料全般での傾向と、『最勝王経』平安初期点の訓法の特徴について2点ほど述べたい。

4.2.1 「者」における「ヒト」「モノ」の読み分けについて

前述のように、訓点資料における「者」の「ヒト」と「モノ」との読み分けを論じたものに門前（1959）があり、平安初期から現代にいたるまでの各時代の法華経方便品の点本を比較して、「者」への施点の変化を論じている。それによれば、「平安極初期」加点の山田本では「者」が人を表す場合には「ひと」、事物を表す際には「もの」と読み分けていたが¹⁸、平安中期以降の点本は一律「もの」と読むということである。これを踏まえて3.1.1に挙げた例（1）（2）（3）を眺めると、次のことがわかる。

- i) 『最勝王経』平安初期点では、「者」が人を表す場合には「ヒト」と読む場合と（(1)）、「モノ」と読む場合（(2)）があり、門前（1959）の調査と異なる結果となっている。
- ii) 『最勝王経』平安初期点で、「者」が人以外の動物や事物を指す場合は「モノ」と読み（(3)）、門前（1959）の調査と同じ結果となっている。

i) の点について、なお検討中ではあるが、『最勝王経』平安初期点を見る限り、人を指す「者」が「モノ」と読まれるのは、「～者無けむ」（「そのような人はいないだろう」）と存在が否定されている場合がほとんどである。

- (76) 虚空に質礙と成り、質礙は虚空と成るとも、諸佛の護持（し）たまふ所をば、能ク傾動する者無キをモチテ。」トマヲス。（206頁）
- (77) 「是の故に知ル當し、…六波羅蜜を満足（せし）メたまへと勸請し、〔於〕無上の法輪轉（し）たまへと勸請し、世に住して無量劫を経て、無量の甚深の妙法を演べ説（き）たまへと勸請（せ）むいは、功德甚深にして能ク比する者無ケむ。」（53頁）

平安期言語資料全般における「もの」「ひと」の使い分けは東辻（1997）に詳しい¹⁹。その中で、『最勝王経』平安初期点から100年ほど下った時期に編まれたとされる『土佐日記』では、「ものはすべて不特定人物を表すのに用いられている」と述べるが、先に挙げた（1）の例から、本資料はこの基準には沿わないことがわかる。仏典が教義を示すもので、その多くが（1）のように一般論として語られるという性質上、不特定人物の呼称としては負性のニュアンスを持つ「もの」より「ひと」がなじみが良く、（2）や（76）（77）のような、実在しない属性の不特定人物を語る際にのみ「もの」が用いられたと考えるのが妥当であろうか。（77）の用例から、必ずしも「もの」が身分や人柄的に劣る人物に対して用いられてはおらず、（1）では「睡眠せる」すなわち睡眠欲にとらわれた者に「ひと」の訓があてられていることから、「もの」と「ひと」の使い分けが負性の有無とは関わらないことがわかる。

例外として次の例が挙げられるが、原文の措辞から見ると「とならば」「ときには」などと補

¹⁸ さらに平安後期の立本寺蔵法華経巻六に異本として記されている明詮（平安初期）の点の写しに、「者」のうち人を表すもののみ異訓として「ひと」と施点されているとも述べている。

¹⁹ 第四部「『もの』『こと』とその類義語」のうちの第二章「古代後期における『もの』と『こと』」。

読されるべき文脈で、ここでは「モノ」が節全体を名詞化する形式名詞と見るのが妥当であろう。あるいは「無き」という語にひかれて「モノ」と読まれた可能性もある。

- (78) 「世尊，若實に是（の）如ク諸佛如來は，般涅槃（し）たまはず〔不〕，舍利も無^キ者とならば，云何ゾ經の中に，涅槃することと及佛の舍利ありて，諸の人天に恭敬し，供養（せ）令むルコトト有（り）と説（き）たまひ，過去の諸佛も現に身骨有（り）て，〔於〕世に流布して，人天の供養するに，福を得ルこと，無邊にアラシメタマヘル。…（後略）」（14頁）
 （世尊，若實如是諸佛如來不般涅槃，無舍利者，云何經中説有涅槃及佛舍利令諸人天恭敬供養，過去諸佛現有身骨流布於世，人天供養得福無邊。…（後略））

4.2.2 「而」の「しかも」と「しかして」の読み分けについて

3.2.1 表3に示したとおり、「而」に施点される例として「（しかも）も」が43例、「（しか）して」が5例あった。そして「（しか）して」と読むのは、発話や偈頌の引用前の定型的な表現に限られた（(27) (45)）。

小林（1967）に、平安時代前半期の訓点資料においては、文頭の「而」を「しかも」と読むのは仏書であり、漢籍ではもっぱら「しかして」と読まれたという指摘がある（同書108頁）。小林は平安初期の仏典の訓点資料として山田本『法華經方便品』、小川本『願經四分律』、西大寺本『最勝王經』、『觀彌勒上生兜率天經贊』朱点、『地蔵十輪經』元慶点、『大唐三蔵玄奘法師表啓』の6点をとり上げて論じているが、このうち「而」を「（しか）も」と読むのは『法華經方便品』、『願經四分律』、西大寺本『最勝王經』、『地蔵十輪經』であり、かつ「（しか）して」の付訓例もあるのは『最勝王經』平安初期点のみであることが調査結果として示されている。なお、平安中期から鎌倉期にかけての漢籍の例として挙げられた『古文尚書』、『漢書楊雄伝』天曆二年点、『史記』延久点、神田本『白氏文集』、『春秋經伝集解』、『群書治要』では、すべての資料で「しかして」あるいは「しかうして」の訓のみが見られる。

このことを踏まえると、小林（1967）の報告自体がすでに語っているように、漢籍・仏典の間で截然とした読み分けがあるという指摘が、『最勝王經』平安初期点においては必ずしも成り立たないのだとわかる。同時に『最勝王經』平安初期点で定型的表現として現れる引用部前の「（しか）して」の読みがどこからくるものであるか、再検討を行うべきであるという課題が立ち上がる。文意に即して解釈をすれば、引用句の前の「而」によりふさわしいのは累加を表す「（しかも）も」より時間的先後関係を表す「（しか）して」であると言える。「於」の読みに、文意に即した多様なパターンがあったことと同様に、平安初期の加点の自在さという特徴が際立って認められる本資料で、「而」を「（しかも）も」と読む仏典特有の特徴に沿いながら、引用句の前に置かれた場合に限ってより日本語文として自然な「（しか）して」を選んだという可能性がひとつには考えられる。他の事例についても検討を重ね、本資料の施点の特徴という大きな問題として検討されるべきであろう。

5. おわりに

本稿では、以下の諸点について調査結果をもとに論じた。

- ① 『最勝王経』平安初期点から、「者」「而」「於」という三つの助辞を取り上げ、その用法・訓法を整理すると、漢字自体に読みを記すのは、「もの」「ひと」「(しか)も」「(うへ)に」「(おい)て」などの自立語由来の和訓で読む場合に限られ、助詞は当該字には記さず、前後の句・節に読み添えるという共通した特徴が見られる。
- ② 定型的な表現、構文と認めてよい訓法がある。
「者」 N (人) の, V (状態・行為) い (主格副動詞) は〔者〕
「而」 会話・韻文の引用前の「而して」
「於」 「於 N」 → 「N の於 (うへ) に」
- ③ 本調査で明らかになった訓法の特徴を同時代の訓点資料を扱った先行研究と照らし合わせると、次のような追考すべき問題点が浮かび上がってくる。
 - i) 「者」に加点する際の「ヒト」「モノ」の読み分けに、法華経方便品での調査では指摘されなかった、「～者が無い」という際には人物を指す場合でも「モノ」と読むという特徴が見られた。
 - ii) 『最勝王経』平安初期点では「而」に加点される訓法として、一般的に用いられる汎用性の高い「(しか)も」と、引用部前に定型的な言い回しで用いられる「(しかして)」が見られた。しかしこれは仏典では「(しか)も」と読み、漢籍では「(しか)して」と読まれる当時の一般的な用法とは異なっている。

『最勝王経』平安初期点をはじめとした訓点資料には、②で挙げたような特殊な構文や語法が多くあると思われる。そうであればこそ、従来日本語史研究の資料としてくり返し用いられ、多くの指摘がなされてきたわけであるが、今回電子化テキストを用いて検索することで、本資料全体の助辞の例を短時間で眺め、いくつかの特徴を指摘することを得た。3.3「於」の項目では、752例という膨大な用例数とさまざまなバリエーションの読みとを整理しきれず、用例数の少ない表現についてはその連語の語形を列挙するにとどまったが、このような文脈に即してあてがわれた読みこそ本来ならばひとつひとつ検討したいところでもある。訓点資料のコーパス化は、そのような手作業の調査では諦めざるを得ない個々の事例の検討を行いやすくすることに、大きく寄与するであろう。今後主要な資料から、用例収集・検索しやすい形に整備していく作業が待たれることを改めて述べて、稿を閉じたいと思う。

参考文献

- 東辻保和 (1997) 『もの語彙こと語彙の国語史的研究』東京：汲古書院。
 門前正彦 (1959) 「漢文訓読史上の一問題 (二) —— 「ヒト」より「モノ」へ」『訓点語と訓点資料』11: 25-41。
 春日政治 (1942) 『西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究』福岡：斯道文庫 (本稿では勉誠社刊の『春

- 日政治著作集』別巻（1985）を用いた）。
- 小林芳規（1967）『平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究』東京：東京大学出版会。
- 大坪併治（1981）『平安時代における訓点語の文法』東京：風間書房。
- 築島裕（2007–2009）『訓点語彙集成』東京：汲古書院。
- 戸川芳郎（監修）（2000）『全訳 漢辞海』東京：三省堂。
- 柳原恵津子（2020）「平安初期訓点資料における不読字の再検討—コーパス・電子化テキストを用いた訓点語研究の試みとして—」『国立国語研究所論集』19: 187–207。

使用したテキスト

- ・「金光明最勝王経」平安初期点
- 春日政治（1942）『西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究』（斯道文庫，本稿では『春日政治著作集』別巻（1985）を用いた）。
- 総本山西大寺（編）（2013）『国宝 西大寺本金光明最勝王経 天保宝字六年百濟豊虫願経』東京：勉誠出版。
- ・前田本『色葉字類抄』
- 財団法人前田育徳会（編）（1984）『尊経閣蔵三卷本 色葉字類抄』東京：勉誠社。
- ・観智院本『類聚名義抄』
- 正宗敦夫（1978）『類聚名義抄』東京：風間書房。

Reassessing Glossing for Auxiliary Letters with “Golden-Light-Sutra (金光明最勝王経: Jinguangming zuishengwang jing)” in Early Middle Japanese

YANAGIHARA Etsuko

Adjunct Researcher, Language Change Division, Research Department, NINJAL

Abstract

I have arranged the manner of reading the character 之 in the Saidaiji version of the Golden-Light-Sutra from the early Heian era of Yanagihara (2020). In it, I argued that with regard to the character as KORE, they attached kunten to 之 itself, while with regard to the character as a postpositional particle or an auxiliary verb such as NO, GA, and so on, they dismiss it in reading. In this study, I will also research about 者, 而, and 於.

When arranging the manner of reading these characters, it seems that the manner of reading was attached to the Chinese character only if they were read in Japanese way of reading (wakun), which was derived from self-sufficient words [such as “mono” (者), “hito” (者), “(shika)mo” (而), “(oi)te” (於), “(ue)ni” (於)], and prepositional particles were not written near the character itself and read additionally around other phrases or clauses as seen in Yanagihara (2020).

In addition, we can indicate that “N (person) の V (situation or deed) いは (者), ” 「而して」 before conversations or verses, and 「Nの於 (ue) に」 were regular expressions or syntaxes too.

Comparing these ways of writing Kunten with other materials in the same era, there is approximately a similar trend in both, however specific rules are different from them in detail in this material. To indicate a person, 者 was read as “hito,” while “～者無し” (which means there is no such person) is read as “mono.” Alternatively, “而” was read as “shikashite” (which is a specific way of reading in reading Chinese passages) only if it was placed before quotation phrases.

Why these features are seen in this material is to be researched in the future.

Keywords: *Golden-Light-Sutra* (Saidaiji version, early Heian period), *kunten* materials, 者, 而, 於